

Title	信念内容の個別化
Author(s)	中山, 康雄
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2006, 32, p. 59-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6003
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

信念内容の個別化

中山 康 雄

目 次

はじめに

1. 信念保持者と信念帰属者の区別
2. Putnam 説の分析
3. Burge 説の分析

結論

信念内容の個別化

中山 康雄

はじめに

志向内容をめぐる内在主義と外在主義の問題は、現在、心の哲学の中心的問題の一つとなっている。この問題は、もともと、Putnam が「意味」の意味 (1975) という論文で展開した Frege や Carnap の内在主義的信念内容の把握への批判に端を発している。本稿では、この Putnam の議論と Burge (1979, 1988) の議論を吟味することにより「志向内容をめぐる外在主義と内在主義の問題」に新たな視点を提供することを試みる。

1. 信念保持者と信念帰属者の区別

1.1 信念保持者を基準とした信念記述と信念帰属者を基準とした信念記述

私たちは、「宇宙は膨張し続けると A は信じている」というように信念帰属をする。「～を信じている」という志向的動詞は、話者が他人に信念を帰属させるときに用いられることが多い。このような文脈では、信念を持つ人と信念を帰属する人がいる。本稿では、信念を持つ人を「信念保持者」と呼び、信念を帰属する人を「信念帰属者」と呼ぶことにする。場合によっては、信念帰属者は信念保持者と一致する。例えば、「日本は将来財政危機に陥ると私は考えている」とある人が言うとき、この人は、日本は将来財政危機に陥るという内容の信念を自己帰属していることになり、このとき、この人は、この命題に関して信念保持者であると同時に信念帰属者でもある。

このように、いかなる信念帰属の場面でも信念保持者と信念帰属者がいることになるが、信念内容は両者において必ずしも一致しているとは限らない。実際、信念内容は、信念保持者を基準に描くこともできれば、信念帰属者を基準に描くこともできる。それならば、信念はどのように記述されるべきだろうか？ Frege は、信念内容のことを「思想 (Gedanke, thought)」と呼び、抽象的対象と考えた (Frege (1892, 1918))。そして、Frege の見解では、信念は、信念保持者と信念内容の間に成り立つ二項関係という

ことになる。[p]により「p」の内容を表すことにすると、この関係は次のように表すことができる：

A believes [p].

そして、Frege は、文の内容と真理値を区別し、直接的文脈では文は真理値を指示するが、間接的文脈では文は内容を指示するとする理論を構築した。

しかし、本稿で私が主張するように、信念内容が信念保持者を基準に描くこともできれば信念帰属者を基準に描くこともできるものであるならば、信念の把握の仕方も変わってくる。つまり、信念内容が両者により異なった仕方理解される可能性が生まれる。そこで、信念記述に関して二つの方法を区別することができる：

(1a) 信念保持者 A を基準とした信念記述： A believes [p]_A.

(1b) 信念帰属者 B を基準とした信念記述： A believes [p]_B.

この二つの内容表記において、[p]_A は信念保持者 A を基準とした信念内容を表し、[p]_B は信念保持者 B を基準とした信念内容を表している。つまり、[p]_x 中に現れるすべての語は、X の視点から意味づけされていることになる。本稿における私の主張は、この両内容の不一致 ([p]_A ≠ [p]_B) が実際にいくつかの場面で起こっているというものである¹⁾。

信念保持者 A を基準とした信念記述は、A が真摯だという仮定のもとに「p?」と問うことにより定めることができる。つまり、次の検証基準が成立すると考えてよい。

(2) 信念保持者を基準とした信念の同定方法

A が真摯な場合には、A に「p?」と聞いた場合、次のことが成り立つ：

A がこの問いに対し肯定的に答える ⇒ A は[p]_A を信じている (A believes [p]_A)。

A がこの問いに対し否定的に答える ⇒ A は[~p]_A を信じている (A believes [~p]_A)。

ここで重要なのは、信念帰属者 B を基準とした信念記述にはこの信念同定法が適用できないということである。というのも、B の観点から見たとき、「p」という文が表す内容の A による理解が誤っている場合があるからである。このとき、たとえ、「p?」という B の問いに対し A が肯定的に答えたとしても、「A は[p]_B と信じている (A believes

[p]_B」と言うことはできない。そして、これと同様の問題が Putnam (1975) や Burge (1979) の議論に現れてくるものなのである。

Burge 流の区別を用いるなら、信念保持者を基準に描かれる信念内容は内在主義的内容に相当し、信念帰属者を基準に描かれる信念内容は外在主義的内容に相当する²⁾。というのも、(2) の同定法に見られるように、信念内容[p]_A は A の内部状態に完全に依存している。これに対し、[p]_B は B の内部状態に依存していることになるが、これは A に関する内在主義的内容と異なるという意味で (A に対して) 外在主義的である。例えば、[p]_B は A が知らない世界に関する情報に依存している場合がある。しかし、この問題については、第 3 節で、より詳しく考察することにする。

1.2 de re 信念と de dicto 信念

信念論理の文脈でよく議論される de re 信念と de dicto 信念の違いも、この信念保持者を基準にした信念内容の個別化と信念帰属者を基準にした信念内容の個別化の特殊例と考えることができる。つまり、de dicto 信念は信念保持者を基準にした信念記述により扱われる信念であり、de re 信念は信念帰属者を基準にした信念記述により扱われる信念と解釈することができる。というのは、「A believes [F(d)]_B」は、「B の視点から見るとき、A は d という対象が F という性質を持つと信じている」と解釈することができるからである。

この問題を例を用いて考察してみよう。演繹能力にたけた信念保持者の de dicto 信念では、(3a) は必ず成り立つが、(3b) は成り立つとは限らない。また、信念帰属者が論理的推論にすぐれていれば、同様に、(3c) は必ず成り立つが、(3d) は成り立つとは限らない。

$$(3a) \quad (A \text{ believes } [d = e]_A \wedge A \text{ believes } [F(d)]_A) \supset A \text{ believes } [F(e)]_A$$

$$(3b)^* \quad (d = e \wedge A \text{ believes } [F(d)]_A) \supset A \text{ believes } [F(e)]_A$$

$$(3c) \quad (B \text{ believes } [d = e]_B \wedge A \text{ believes } [F(d)]_B) \supset A \text{ believes } [F(e)]_B$$

$$(3d)^* \quad (B \text{ believes } [d = e]_B \wedge A \text{ believes } [F(d)]_A) \supset A \text{ believes } [F(e)]_A$$

$$(3e) \quad (d = e \wedge A \text{ believes } [F(d)]_B) \supset A \text{ believes } [F(e)]_B$$

(3c) を B の視点から描いたのが (3e) であり、これが B の視点から記述された de re 信念となる。つまり、信念記述者 B の視点から描かれた場合、直接的に現れる記号の指示対象と [p]_B という信念帰属の内容中に表れる記号の指示対象は一致している。すると、

(3e)の例では、「 $d = e$ 」中の「 d 」の指示対象と「 $[F(d)]_B$ 」中の「 d 」の指示対象は同一となり、従って、「 $[F(d)]_B$ 」中の「 d 」は「 e 」と置換可能となるのである。

de re 信念の問題は同一性文に関する信念記述の問題であるが、上の考察は（理想化された）信念帰属者を基準にした信念記述に関して一般化できる。

$$(4a) (B \text{ believes } [p \supset q]_B \supset (p \supset q)) \supset (((p \supset q) \wedge A \text{ believes } [p]_B) \supset A \text{ believes } [q]_B)$$

つまり、「 p ならば q 」が信念帰属者Bの視点から成り立っているなら、BがAに「 p 」で表される信念をBの視点から帰属するなら、BはAに「 q 」で表される信念もBの視点から帰属する。これに対し、（理想化された）信念保持者を基準に成り立つのは、次の関係のみである。

$$(4b) (A \text{ believes } [p \supset q]_A \wedge A \text{ believes } [p]_A) \supset A \text{ believes } [q]_A$$

後に、第2節で論じるように、Putnam (1975) の議論においては、(3e) のタイプの *dere* 信念の推論が行われている。そこでは、語り手である Putnam は、双子地球上の水は *XYZ*だと想定しているので、「双子地球上で生きる Oscar₂ は *XYZ*がのどの渇きを潤すと考えている」という結論を引き出せるのである。

$$(5) (\text{water}_{TE} = XYZ \wedge \text{Oscar}_2 \text{ believes } [\text{water}_{TE} \text{ quenches thirst}]_B) \supset \text{Oscar}_2 \text{ believes } [XYZ \text{ quenches thirst}]_B.$$

1.3 信念内容と言葉の意味

「意味」という言葉には、少なくとも二つの意味がある。一つの意味は、辞書に書かれているような意味であり、このことを「辞書の意味」と呼ぶことにしよう。これは、言語共同体で認められている「公式の意味」であり、社会的対象だと言える。これに対し、「話者の発話意味 (speaker's utterance meaning)」と Searle が呼んだような文脈依存的意味がある (Searle (1979))。本稿では、これを「話者の意味」と呼ぼう。ある語句 X の話者の意味は信念保持者を基準にした X の内容に対応し、 X の辞書の意味は信念帰属者が言語を完璧に習得している場合のその信念帰属者を基準にした X の内容に対応している。

Donnellan (1966) は、確定記述 (definite description) に関して「指示的用法 (referential use)」と「帰属的用法 (attributive use)」を区別したが、この区別も、信念保持者を基準にした内容と信念帰属者を基準にした内容として分析できる。Kripke (1979) は、同様の観点から、「話者指示 (speaker reference)」と「意味論的指示 (semantic reference)」を区別している。Kripke の例では、話者が次のように発言する (p. 78) :

(6) The man over there drinking champagne is happy tonight.

このとき、語り手である K は、「そこでシャンパンを飲んでいるその男」と言うことにより話者 S が指示しようとした人物が、実は、絶対禁酒者であり、シャンパンではなくソーダ水を飲んでいるのだと知っている。しかし、S も聞き手 H もこのことを知らない。つまり、この例では、次の関係が成り立っている。

(7) [the man over there drinking champagne]_S = [the man over there drinking champagne]_H &
[the man over there drinking champagne]_S ≠ [the man over there drinking champagne]_K.

そして、このとき、信念帰属については次のことが成り立っている :

(8) S believes [the man over there drinking champagne is happy tonight]_S &
S does not believe [the man over there drinking champagne is happy tonight]_K.

ここでは、話者を基準にした信念内容は指示的用法による対象同定に相当し、語り手を基準にした信念内容は帰属的用法による対象同定に相当する。そして、この確定記述の対象同定は、より一般的に表現すれば、確定記述の外延の同定に他ならない。

2. Putnam 説の分析

第1節で分析したような内容の区別は、Putnam も Burge も見落としていたものである。この節では、Putnam (1975) における信念内容についての議論を検討し、分析することにする。Putnam は、この論文で、地球上で生活する Oscar₁ と双子地球上での彼

の対応者 $Oscar_2$ が同一の心理学的状態にあるという想定の実験を行う。ただし、双子地球上で「水」と呼ばれている液体は XYZ という物質から成り立っている。そして、この物語は次のように進められる。

「しかし、「水」という語の外延は、地球上では、1750 年でも 1950 年と全く同様に H_2O である。そして、「水」という語の外延は、双子地球上では、1750 年でも 1950 年と全く同様に XYZ である。 $Oscar_1$ と $Oscar_2$ は、彼らが同一の心理学的状態にあったにも関わらず、そして、その時点での科学の段階では、「水」という語を彼らが異なった仕方でも理解していたことを発見するのに彼らの科学者集団が 50 年以上要するだろうにもかかわらず、1750 年において「水」という語を異なった仕方でも理解していた。」(p. 244)

ここで本稿にとり重要なのは、このとき、Putnam は、「水」の外延について自分の視点からのみ記述しているという事実である。そして、ここから、Putnam は、次の結論を引き出すのである：

「だから、「水」という語の外延（そして、実際、直観的・前分析的な使用におけるこの語の「意味」）は、話者自身の心理学的状態の関数ではない。」(p. 244)

ここで注意しなくてはならないのは、このような結論は Putnam を基準にした場合に成り立つのであって、 $Oscar_1$ や $Oscar_2$ を基準にした場合には成り立たないということである。

$[water_E]_{Putnam} = [H_2O]_{Putnam}$ & $[water_{TE}]_{Putnam} = [XYZ]_{Putnam}$.

明らかに $[H_2O]_{Putnam} \neq [XYZ]_{Putnam}$ なので、 $[water_E]_{Putnam} \neq [water_{TE}]_{Putnam}$.

よって、 $[water_E \text{ quenches thirst}]_{Putnam} \neq [water_{TE} \text{ quenches thirst}]_{Putnam}$.

また、次のことが成り立つ：

$Oscar_1$ believes $[H_2O \text{ quenches thirst}]_{Putnam}$ &

$Oscar_2$ believes $[XYZ \text{ quenches thirst}]_{Putnam}$.

しかし、1750 年には水の化学組成はまだ知られていなかったのだから、次のことが、同時に成り立つ：

Oscar₁ does not believe [H₂O quenches thirst]_{Oscar1} &
Oscar₂ does not believe [XYZ quenches thirst]_{Oscar2}.

この分析から明らかなように、この問題の根底には、「水」という語についての Oscar たちと Putnam の間での解釈の違いがある。

[water]_{Oscar1} ≠ [water_E]_{Putnam} & [water]_{Oscar2} ≠ [water_{TE}]_{Putnam} &
[water]_{Oscar1} = [water]_{Oscar2} = [water_E]_{Putnam} ∪ [water_{TE}]_{Putnam}.

だから、Oscar たちが「水」という語を異なった仕方で理解していたということは Putnam を基準にしたときに成り立つのであって、Oscar たちを基準にすれば、彼らはこの語を同じ仕方で理解していたことになる。ここで、Oscar₁ が、突然、双子地球に連れてこられたとしてみよう。このとき、Oscar₂ が Oscar₁ に対し「水をくれ」と言えば、Oscar₁ は XYZ を Oscar₂ に与え、同時に、自分は水を Oscar₂ に与えたと思うだろう。つまり、Oscar たちは、Oscar たちを基準にすれば、このとき「水」という語を同じ意味で理解しているのである。

Putnam の双子地球の例からわかるように、このような哲学的思考実験において、Putnam は、一貫して、語り手の視点から志向内容や意味について語り続けるのである。このことは、次の「ニレ (elm)」と「ブナ (beech)」の例についても同様に成り立つ。ここでは、Putnam の分身が双子地球で生活しており、双子地球では、「ニレ」と「ブナ」の意味が地球とは逆転しているとされている。そして、Putnam も Putnam の分身もニレとブナを見分けることができないとされている。

「あなたが二元論者なら、私の分身が、私が持つと同じ言語化された思考を持ち、同じセンスデータを持ち、同じ傾向性を持ち、などなどとしてみよう。彼の心理学的状態が少しでも私と異なっていると考えることはばかげている。しかし、彼が「ニレ」と言うときには彼はブナを「意味」しており、私が「ニレ」と言うときには私はニレを「意味」している。どのようにしてみても、「意味」は頭の中にはないのである。」

(p. 227)

しかし、この物語の登場人物たちは、どちらも、ニレを指示するために「ニレ」という語を用いているのである。

Putnam₁ believes [I mean elm by saying 'elm']_{Putnam1} &

Putnam₂ believes [I mean elm by saying 'elm']_{Putnam2}.

これに対し、Putnam は、上に引用した記述において「意味している」という語を語り手である自分の観点から用いている。語り手である信念帰属者 B の視点からは、elm_E はニレであり、elm_{TE} はブナである。つまり、

Putnam₁ believes [elm_E is elm]_B &

Putnam₂ believes [elm_{TE} is beech]_B.

が成り立つ。

これまで見てきたように、言葉の「意味」や外延が話者の心的状態から独立になるのは、信念内容を信念帰属者の側から記述した場合である。しかし、私たちは、信念保持者の信念内容をいつも無視できるわけではない。例えば、信念保持者を合理的行為者と考えて彼の行動を彼の欲求や信念を用いて説明しようとするとき、私たちは信念保持者を基準にした信念内容を必要とする。

3. Burge 説の分析

3.1 内在主義的内容と外在主義的内容

Burge も Putnam と似た思考実験を使用して、信念内容も含めた志向内容が個人の内部状態によって完全に決定されていないことを示そうとする。前田(2004)も言及するように、Burge は Putnam (1975) が指摘した自然種名辞に関する志向内容の外在性を一般化し、この議論を志向内容全般に適用できることを示そうとした。また、Burge は、思考実験を構成するにあたり、ひとりの人物の志向内容を現実の言語共同体と仮想的言語共同体とで比較する方法を用いている。こうして、志向内容に及ぼす社会環境の要素を明らかにしようとするのである。関節炎 (arthritis) の例は、Burge の用いる例の典型的なものなので、本稿ではこの例を詳しく検討することにする。

Burge の例では、現実世界で、私の関節炎は腿にまで広がっていると誤って思ってい

ある人物が現れる。この人物をここで「A」と名づけよう。このとき、医師たちが「関節炎」という語を普通の意味での関節炎とともにリウマチ性の病気にも適用するような反事実的状況が想定される。そして、最後に、この反事実的状況では、「関節炎」という語の意味が違うので、「私の関節炎は腿にまで広がっている」とAが考えているとすることができないと Burge は結論する。つまり、Burge の分析では、現実世界ではAはある誤った信念を持っているとすることができるが、反事実的状況ではAは関節炎に関することについてほとんど信念を持っていないことになる。

この Burge の例を、第1節の方法で明確化してみよう。まず、現実世界の言語共同体 C1 と反事実的状況における言語共同体 C2 を考えよう。C1 では、「関節炎」は関節の炎症を意味している。一方、C2 では、「関節炎」は普通の意味での関節炎とともにリウマチ性の病気にも適用される。すると、Aが「私の関節炎は腿にまで広がっている」と主張するときのAの信念内容に関して次のような分析ができる。

- (7a) A は w_{c1} で信じる：[私の関節炎は腿にまで広がっている]_A. (真)
- (7b) A は w_{c2} で信じる：[私の関節炎は腿にまで広がっている]_A. (真)
- (7c) A は w_{c1} で信じる：[Aの関節炎は腿にまで広がっている]_{c1}. (偽)
- (7d) A は w_{c2} で信じる：[Aの関節炎は腿にまで広がっている]_{c2}. (真)
- (7e) A は w_{c2} で信じる：[Aの関節炎は腿にまで広がっている]_{c1}. (Burgeによれば
帰属不可能)

この(7e)が Burge の反事実的状況にあたり、Burge は、このとき、関節炎に関する信念を私たちはAに帰属できないと判定する。また、このとき、信念内容の関係は、次のように表せる。

- (8a) [Aの関節炎は腿にまで広がっている]_{c1} ≠ [Aの関節炎は腿にまで
広がっている]_{c2}.
- (8b) [私の関節炎は腿にまで広がっている]_A ≠ [Aの関節炎は腿にまで
広がっている]_{c1}.
- (8c) [私の関節炎は腿にまで広がっている]_A は [Aの関節炎は腿にまで
広がっている]_{c2} に含まれる。

ここで、「内在主義的意味」と「外在主義的意味」という用語を用いれば、[X]_A は内在主義的意味を表し、[X]_{c1} と [X]_{c2} はそれぞれ外在主義的意味を表している。(8a)は、

二つの言語共同体における「関節炎」という語の意味の微妙なズレから導かれる。(8b)は、第2節で論じた信念保持者を基準にした信念内容と信念帰属者を基準にした信念内容が異なりうることとAの「関節炎」という語の誤りから帰結する。(8c)の場合は、Aの「関節炎」という語の理解が不十分なので、言語共同体の「関節炎」の意味とは異なる。ただし、この場合には、Aの理解は、言語共同体の「関節炎」の意味の部分的なものでこれと矛盾しない。

3.2 志向内容とその自己知

Burge (1988) は、外在主義と自己知が両立することを示そうとしている。この節では、第1節での信念内容の区別を基盤にして、自己知の問題について考察したい。

まず、AとBが「believe」という語を正しく理解しているという仮定のもとに次のことが成り立つことを確認しておきたい。

(9a) $A \text{ believes } [p]_A \equiv A \text{ believes } [I \text{ believe } [p]_A]_A.$

(9b) $A \text{ believes } [A \text{ believes } [p]_A]_B \equiv A \text{ believes } [I \text{ believe } [p]_A]_A.$

(9c) $A \text{ believes } [p]_A \equiv A \text{ believes } [A \text{ believes } [p]_A]_B.$

(9d) $A \text{ believes } [p]_B \equiv A \text{ believes } [I \text{ believe } [p]_B]_A.$

(9a) は、中山 (2004) において主張されている心的状態の透明性のテーゼから帰結する主張である。(9b)と(9d)は、AとBにおいて「believe」という語の解釈が一致しているという前提から帰結する。そして、(9c) は、(9a)と(9b)から導かれる。Burge (1988) の主張する自己知は(9d)の表現法に対応している。水は液体であるとAが考えている場合を想定しよう。このとき、BurgeによればAは、(水は液体であるという) 第一次の思考を考えると同時にこの思考を自分自身のものと考えている。第一次の思考内容は外在主義的背景条件により定められ、第二次の判断の内容はその自己言及的性質により第一次の内容に論理的に固定されている (p. 75)。このような Burge (1988) の考察は、本稿の表現法を使用して(9d)の図式により表現できる。

$A \text{ believes } [\text{water is a liquid}]_B \equiv A \text{ believes } [I \text{ believe } [\text{water is a liquid}]_B]_A.$

この表現法では、Aがpを信じるという第一次の信念内容は外在主義的意味で成り立つが、第二次の信念内容は、第一次の外在主義的信念内容に対する第二次の内在主義的

信念内容として解釈される。そして、第二次の信念内容が内在主義的になるのは、自己知の持つ自己言及的特性から考えて不可避であろう。

(9a) と (9d) からわかるように、自己知には二つの意味がある。(9a) は信念保持者を基準にした自己知を表現しており、内在主義的なものである。これに対し、(9d) は、Burge (1988) が「自己知」と呼んでいる心の状態であり、外在主義的なものである。つまり、信念内容に関して内在主義的なものと外在主義的なものを区別するとき、この区別は自己知にも拡張可能となる。そして、外在主義と自己知が両立するという Burge (1988) の主張のより正確な表現は、「外在主義的信念内容の把握と外在主義的自己知の把握は両立する」ということに他ならないのである。このように明確化するなら、「外在主義と自己知は両立する」という一見パラドキシカルに思える Burge (1988) のテーゼも、それほど大胆な主張ではないことが判明する。

結論

内在主義的な意味での信念内容も外在主義的な意味での信念内容もどちらも、私たちは、日常で使用しており、その意味で、どちらも有効である。だから、内在主義と外在主義のどちらか一方が正しいとする議論は不毛である。Putnam (1975) も Burge (1979, 1988) も、一貫して、信念帰属者の立場から信念内容を描いたため、信念内容の外在主義的側面だけが描かれたのである。しかし、信念保持者の側から信念内容を描けば、内在主義的信念内容が得られる。このように、信念内容は二つの側面を持つのである。

注

- 1) X を基準にした信念内容 $[p]_x$ がどのようなものであるかを正確に記述するには異なる方法があり、その方法の違いにより信念内容に関する異なる意味論が得られる。しかし、本稿では、一般性を保ち、何がこの議論に本質的かを見やすくするために、 $[p]_x$ の意味論を詳細に与えることはしない。
- 2) Burge は、「内在主義」と「外在主義」という用語ではなく、「個体主義 (individualism)」と「反個体主義 (anti-individualism)」という用語を用いる。前田 (2004) は、「内在主義」と「個体主義」、そして、「外在主義」と「反個体主義」が厳密には等しくないことを指摘している。それは、「内 (外) 在主義」は物理的な環境との関係における心の個別化に関わるのに対し、「(反) 個体主義」は、他者の心のとの関係における心の個別化に関わるからである (p. 164)。しかし、本稿では、両方の意味を含むものとして「内 (外) 在主義」という語を用いることにする。

参考文献

- Burge, T. (1979) "Individualism and the Mental," *Studies in Metaphysics: Midwest Studies in Philosophy*, vol.4, pp. 73-121.
- (1988) "Individualism and Self-knowledge," in *Journal of Philosophy* 85/11 pp. 649-663.
Reprinted in Q. Cassam (1994) *Self-Knowledge*, Oxford University Press, pp. 64-79.
- Davis, S. (ed.) (1991) *Pragmatics: A Reader*, Oxford University Press.
- Donnellan, K. (1966) "Reference and Definite Descriptions," *Philosophical Review* 75, pp. 281-304. Reprinted in Davis (1991) pp. 52-64.
- Frege, G. (1892) "Über Sinn und Bedeutung," *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, pp. 25-50.
- (1918) "Der Gedanke," *Beiträge zur Philosophie des deutschen Idealismus*, Band I, pp. 58-77.
- Kripke, S. (1979) "Speaker's Reference and Semantic Reference," in P. A. French (ed.) (1979) *Contemporary Perspectives in the Philosophy of Language*, University of Minnesota Press, pp. 6-27. Reprinted in Davis (1991) pp. 77-96.
- 前田高弘 (2004) 「解題」(Burge (1979) に対する訳者の解題) 信原幸弘 (編) (2004) 『シリーズ 心の哲学 III 翻訳篇』勁草書房 pp. 163-167.
- 中山康雄 (2004) 『共同性の現代哲学 — 心から社会へ』勁草書房
- Putnam, H. (1975) "The Meaning of 'Meaning'," in H. Putnam (1975) *Mind, Language, and Reality: Philosophical Papers*, vol. 2. Cambridge University Press pp. 215-271.
- Searle, J. R. (1979) "Referential and Attributive," *Monist* 62 pp. 190-208. Reprinted in Davis (1991) pp. 121-133.

Individuation of Belief Contents

Yasuo NAKAYAMA

The discussion about internalism and externalism concerning intentional contents is a central issue of the contemporary philosophy of mind. This problem goes back to Putnam (1975), where he criticizes Frege's and Carnap's internalistic understanding of belief contents. In this paper, I will examine arguments in Putnam (1975) and Burge (1979, 1988). Then, I will propose a new viewpoint about the problem of internalism and externalism concerning intentional contents.

It is the central thesis of this paper that we should distinguish belief contents based on the belief bearer and belief contents based on the ascribing person. I will show that belief contents are always describable from these two different viewpoints. Belief contents based on the belief bearer correspond to internalistic contents, whereas belief contents based on the ascribing person correspond to externalistic contents. According to this distinction, Putnam (1975) and Burge (1979, 1988) describe belief contents only from the viewpoint of the ascribing person. However, it is incorrect to ask which viewpoint is right.